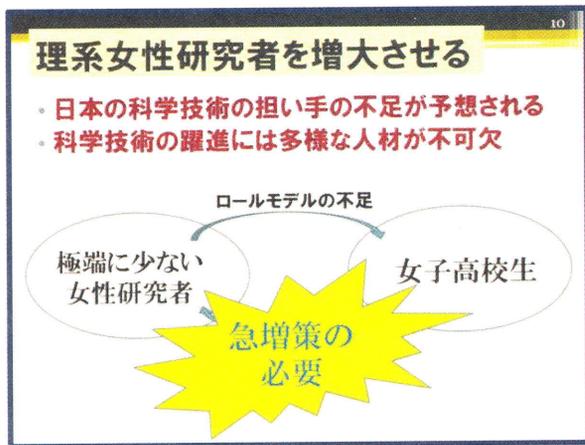


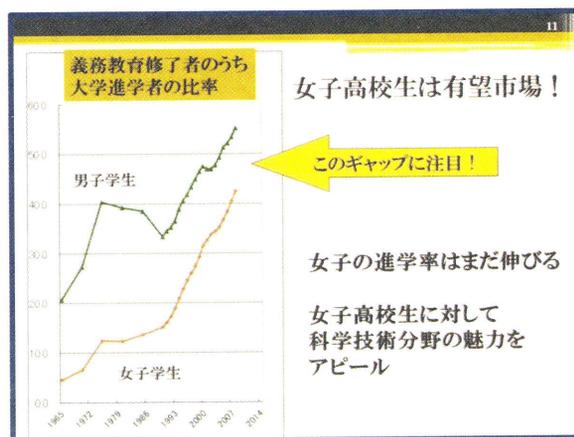
ほとんど増えていません。文部科学省の女性研究者支援モデル育成事業は2008年から始まっていますので、まだこれからに期待することは必要かなと思いますが、理学、工学、農学という3つがなかなか立ち上がっていきません。農学は2000年頃から若干良い傾向が出ているとは思いますが、まだまだ工学と理学に関しては、よほど女子学生をエンカレッジしなければ、教員の女性比率は上がっていかないと思います。



「理系女性研究者を増大させる」ということですが、日本の科学技術の担い手の不足が予想されるとか、科学技術の躍進には多様な人材が不可欠ですが、極端に女性研究者が少ないとロールモデルの不足で女子高校生は理系に親しみが持てません。また、研究者になる人が少ないということは、いつまでたってもこの悪循環が絶ちきれないということになりますので、やはりどこかで急増策を意図的に行うことが必要

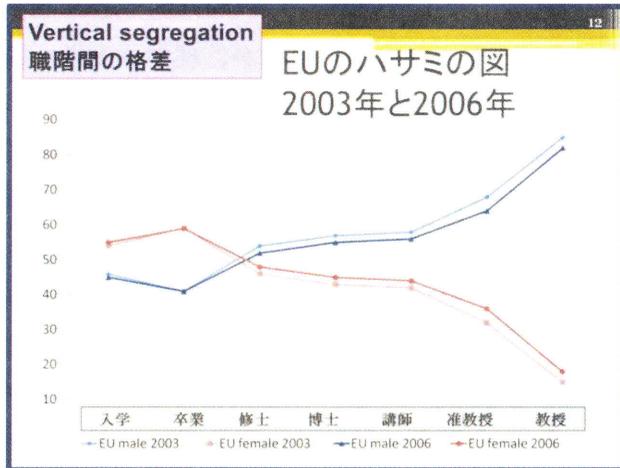
だと思います。

さて、次は進学率です。大学生全体の中で女子の比率はどれだけかということと違い、このグラフは一緒に中学校を卒業した仲間の内で何パーセントが大学まで進学したかを示しています。確かに1965年頃に比べれば、女子の進学率は上がっています。男子とはまだ10%ほどの大きなギャップがありますので、女子高校生は有望市場です。子どもが1人か2人しかいない時代になりましたので、女子でも短大ではなく大学へ進学するようになってきており、多くの家庭で男女の区別がなくなっていると思います。子どもが大勢の時には「お兄ちゃんは大学だけど、あなたは短大ね」という話だったと思います。進学率はまだまだ伸びる可能性がありますので、このギャップに注目して、女子高校生に科学技術分野の魅力をアピールすることは、大いに意味があると思います。



(スライド 11)

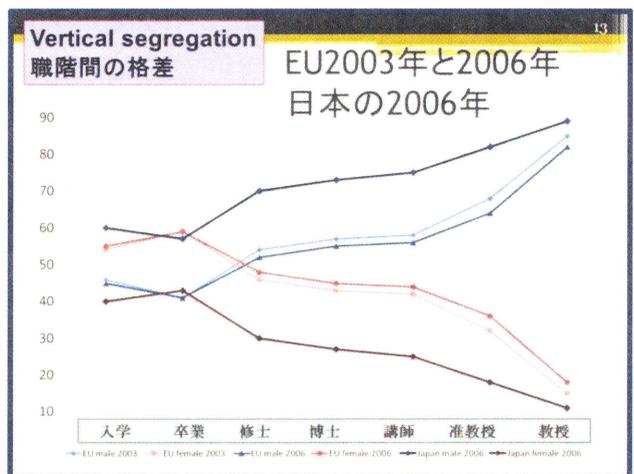
日本においては女子学生の進学率が45%に達するかというところですが（男子学生で55%くらいです）。ところがEUですと、これが逆転してまいります。これはEU27か国の平均ですが（次ページスライド12）、横軸は入学時点、卒業、修士、博士、講師、准教授、教授、縦軸はそれぞれの時点での男女の比率を示しています。入学時点で、EU各国の平均では、女子が55%くらいで、男子が45%くらいなのです。女子のほうが大学進学時点で多いので



(スライド 12)

様々な形で推進しております。これが（「ハサミの図」と呼んでいます）、できるだけ閉じた形になるのがふさわしいのですが、EUでもハサミの刃先の開きが悩みです。なんとか教授の時点でガクッと下がらずに、25%くらいのところには持っていきたいというのがEUの一つの目標ですが、これがなかなか難しいようです。

しかしEUの人に「まずはここまであればいいのではないですか」と言いたいです。日本のグラフをこのEUのグラフの上に載せますとこうなります。まず先ほどご覧いただいたように、大学入学時点では文理合せて男子が6割、女子が4割という比率ですが、理系だと女子は3、男子が7ですから、ハサミのようにクロスするはずもなく、「お箸の図」と私は呼んでおりますが、完全に男子と女子とでは住んでいるところが違うというようなグラフになってくるわけです。女子の進学率はだんだん上がっていますが、数の増大だけでなく分野の偏りをなくす必要があると思います。修士に進学する人は、男子では相対的にぐっと上がって、女子は30%くらいになります。博士で下がる、准教授で下がる、教授で下がるという形で、ガタガタガタッと下がっているのです。何とかこれをもう少しあげて、女性研究者を増やしたいというのが政府の考えているところです。岩手大学でもそういうところを目標に頑張っておられるのだらうと思います。今は事業の呼び名が違っているということ



(スライド 13)

をここで拝見して初めて気が付きました。三重大学は「女性研究者支援モデル育成事業」でした。今は文部科学省の「女性研究者研究活動支援事業」となっているのですね¹。2006

¹ 「女性研究者支援モデル育成事業」は2011年より名称が変更され、現在「女性研究者研究活動支援事業」として継続されている。

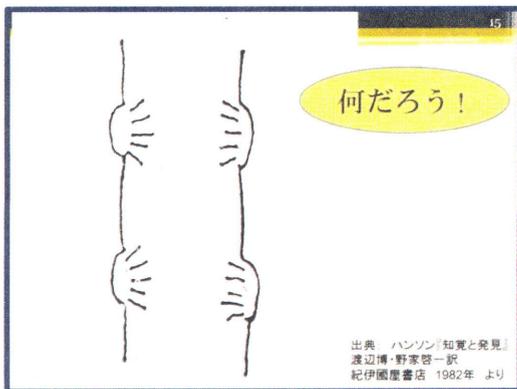
年から事業が始まり、保育園の整備や夫婦とも大学教員というカップルの支援など、様々な取り組みが実践されてきました。なんとか女性研究者を増やしたいということですね。

ここまでが人材の話です。まだまだ女性研究者、女子学生、学部で卒業する人も少なく、大学院を卒業する人も非常に少ない中、なんとか増えて欲しいと思っていますが、もうひとつの切り口として、「科学知識のジェンダー問題」について若干お話ししたいと思います。科学知識は観察に基づいているので、誰が見ても同じで客観的で中立的だと思われていますが、本当にそうでしょうか？科学知識にもジェンダーが入り込む余地があるのではないかということをお話ししたいと思います。

科学知識のジェンダー問題

- ・ **科学知識は客観的で中立的か？**
観察は解釈すること
- ・ **科学知識はジェンダー・フリーか？**
科学に解釈が入り込めば、ジェンダーも侵入
- ・ **説明には言葉が必要・・・日常と接続**
言葉はそもそも人間中心的

(スライド 14)



(スライド 15)

クイズです。これはなんでしょう？（フロアに対して）手？手ですか？あなたは？繊維？多分いろいろなことをこの会場にいらっしゃる方は想像されると思います。これを教室で学生に見せて順番に聞きますと、「ダンゴ虫が串に刺さっている」とか「木の枝をはらった幹の状態」であるとかいろいろなことを言います。今日はいきなり「手」なんて言われたので私としては若干どぎまぎしております。幾人が聞いていっ

た後に、「先生、僕クマが見えます」とか「コアラが見えます」という人がいるのですよ。「人が見えます」とか。名古屋大学に非常勤で行きますと、基本的にこれはコアラなんですね。東山動物園にコアラがいるので、熊というよりはコアラと答える人が多いのです。様々な形を想像しますね。私たちは網膜に映っているものだけを観察しているわけではないのです。自分の納得がいくように解釈して見ているということなのですが、この図を作ったハンソンはこれをクマにしております。だまし絵で有名な老婆と少女の絵で、ある視点を置いて見ると老婆に見える、別の視点では少女に見えるものがありますが、全く画面に映っていないものでも、私たちは想像力を働かせて見ることができる。その働かせ方は、一人一人の脳の中の情報によるのであって、一人一人のもの見え方はすごく違うのです。新幹線だ飛行機だというように、一目瞭然というわけでなければ様々な意見が出ます。赤ちゃん熊をおんぶしている熊でもいいし、木から降りようとしている熊でもいいのです。そこまで想像される方はめったにいないと思いますが、それでもこれだけの情報から人々は様々な想像を膨らませて、私たちが事実だと思うことを見ているのです。スライド 15は誰もが真ん中の部分を実体と思って見ているかもしれませんが、「ビルの谷間です」とか、「両方のビルの部屋からすごく楽しそうな声が谷間に響いているのです」という学生もい